おおさか KEYわーど 第28回

陰陽師の驚いたのは？

恋しくば尋ね来て見よ…大阪の文芸や芸能

境内鳥居前全景

境内御社殿右前方

安倍晴明50歳木像

安倍晴明神社　（写真提供：阿倍王子神社）

大坂の毛馬に生まれた俳人・与謝蕪村（1716−1784）。芭蕉の俳風を復古して江戸中期の俳壇をリードしたが、中国や日本の歴史や文学を踏まえ、物語の一場面を彷彿とさせる句をなした。

「秋立つや何におどろく陰陽師　　蕪村」

夏が終わり、秋になると、私はこの句を思い出す。とはいっても、秋が立つ「立秋」は昔の季節の数え方によるもので、現代では八月七日ごろが「立秋」になるそうだが、句は「秋が立った。何か悪い卦が出たのか占いをつかさどる陰陽師がハッと驚いている」といった意味である。現代では夢枕獏の小説が原作の映画「陰陽師」で知られるが、古代の律令制において中務省（なかつかさしょう）の陰陽寮に属したのが陰陽師で、後には祭祀や占術、呪術の全般をつかさどり、中世以降は民間で占術等を行うものも指すようになった。占いの卦は、果たして凶兆だったのか。蕪村は劇的な一瞬を映画のシーンのように句に描いている。

この陰陽師で最も有名なのが、小説、映画の主人公にもなった平安時代の安倍晴明である。晴明が生まれた地とされるのが、安倍晴明神社（阿倍野区阿倍野元町）のあたりとされる。社伝によると同社の創建は寛弘4（1007）年で、江戸時代には大坂城代さえもが参拝するほどの格式があったが、幕末に衰えた。しかし、大正10（1921）年に阿倍王子神社の末社として認可され、現在につづいている。境内にある泰名稲荷神社には、伝説上の晴明の父親である安倍泰名（やすな）も祀られている。

少年時代から晴明は聡明で、占いにも卓越した能力を発揮したので、超能力をもつ狐の子どもではないかという伝説が生まれた。それを題材としたのが、竹田出雲が享保19（1734）年に道頓堀・竹本座で初演した人形浄瑠璃「芦屋道満大内鑑」である。安倍保名（やすな）が助けた信田の森の狐が、恩返しのために葛の葉という人間の女性に化けて保名に嫁ぎ、晴明を産む。しかし正体がばれたため、

「恋しくば尋ね来て見よ和泉なる
信太の森のうらみ葛の葉」

の歌を障子に書き残して森に帰っていく。

「恋しくば…」の歌を障子に書く「葛の葉子別れの段」は大きな見せ場で、障子に左手で書いたり、口に筆をくわえて書いたり、アクロバティックな動きで狐の霊力を表現する。いまも文楽の人気演目であり、平成20年、御即位二十年で関西を御訪問中であった天皇皇后両陛下も国立文楽劇場で御鑑賞されている。

「芦屋道満大内鑑」は早くも歌舞伎で上演されたほか、他の芸能にも様々な影響を及ぼした。「芦屋道満大内鑑」のパロディである上方落語の「天神山」は、安居神社（天王寺区逢阪）が舞台となり、「恋しくば訪ね来てみよ、南なる天神山の森の中まで」を残して母狐が去るところでサゲになる。また、懐かしい芸人さんだが、三味線漫才トリオの「三人奴（さんにんやっこ）」の逆から文字を書いたり、筆を口にくわえて障子に書く「葛の葉の曲書き・障子抜け」はみごとな芸であった。

話はひろがったが最初に戻り、蕪村の句にいう陰陽師が驚いた卦がなにか、瑞兆か凶兆か、皆さんはどう思いますか。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。